

# 中学英語における遅進生徒指導法仮設設定

## その2 仮設設定

盛田 義彦

### I. はじめに

これは昨年引き続きの調査である。今回の目標は前回の結果を確かめること、遅進生徒にアンケートを求めて、その傾向を知り、又教官からの観察を加え、遅進生徒に対する指導法を考察してみること。尚、調査対象は、現中学三年生とし、42年1月に調査を実施した。

### II. 遅進生徒数

表1

遅進生徒数移動表（一度でもその学年に遅進歴のある者を遅進生徒として）

	一年(39年)	二年(40年)	三年(41年)
	24名	17名	11+2名
新しく 加わった者		6名	5名 4名
合計	24名	23名	22名

+2は再加入者

この表は昨年と同様にして作ったものであるが、昨年よりも数が減少している。しかし、ここから言えることは昨年と同様に遅進生徒は一年から引き続く者が多く、二年、三年になってから遅進生になるものは少ないことである。

### III. 遅進生徒の学習成績の移行

表2 一年一学期で遅進生になった者（10名）

事項	学年		
	一年 二・三学期	二年	三年
-σ以下	1回	3名	
	2回		4名 1名
	3回	2名	
	4回	4名	
	5回		3名
	0回	1名	3名

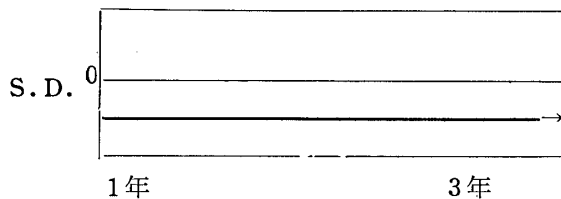
この表も前回と同様のものであるが、やはり昨年と同様、一年一学期に遅進生になると回復することが、難しくなることが解る。一年二学期に遅進生になった場合も今回、前回と同様の結果が見られた。又学力回復についても前回とほぼ同様の結果が見られるので省略する。

### IV. 遅進生徒の学習成績移行の類型

前回、参考資料とした遅進生徒の典型的な例をもとに遅進生徒を7つの類型に分類し考察してみたい。

#### 1. A類型（10名）

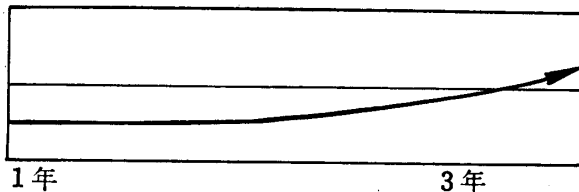
A類型



このタイプは、さらに二つに分けることができる。すなわち、-σ以下を進むものと、-σあたりを進むものである。いずれの場合も学習初期から問題を起しており、このままの学習を続けるならば、-σ以下で進んでいる場合成績回復の見込みは全くないといえよう。-σあたりで進む場合、回復は前者よりもずっと容易であろう。しかし両方の場合ともS.D.が0以上になるには継続的な努力が必要であろうし、そうなるには、かなりの時間がかかりそうである。（B類型参照）

#### 2. B類型（4名）

B類型

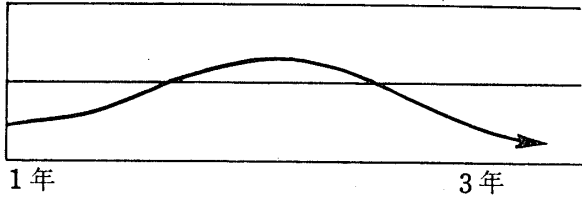


このタイプは遅進歴を持つ生徒の中では好ましいものである。しかし+σ以上になることは少なく、なっても又+σ以下になりやすい。このタイプに属する生徒は長期間の努力をしているのであろう。学習初期にまずくとこのように後まで影響するともいえよう。し

かし、学習初期に遅進性になった者をこのようなタイプで回復させることは遅進生指導の目標ともなろう。

3. C類型 (3名)

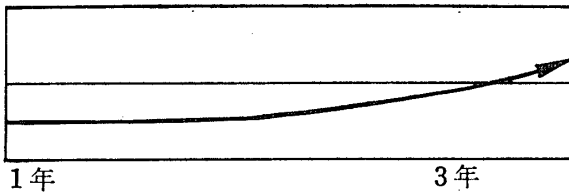
C類型



このタイプは学習初期に起した困難も、一時回復したが、やがて、成績不振に陥るのである。三年生になって成績不振にもどるのは一つには学習初期のつまづきが原因であろうが、生徒の精神的な要素や環境が大きな原因のように思われる。従って、回復させる為には、学習に力を注ぐのは、勿論であるが、精神的な面で指導せねばならないであろう。

4. D類型 (4名)

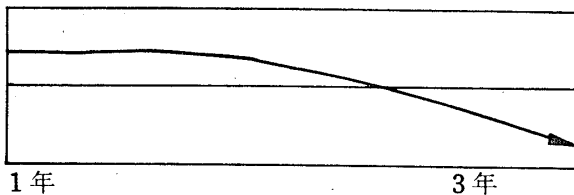
D類型



学習初期の困難も、やや回復はしたものの、ある程度以上にはなれずに停滞している。このタイプの生徒には何か刺戟の機会がほしいものである。それを契機に向上するかもしれないと思われるからである。又このような生徒の中には、こつこつと努力している者もいるが、そのような者には、勉強法を再考させる必要がある。

5. E類型 (2名)

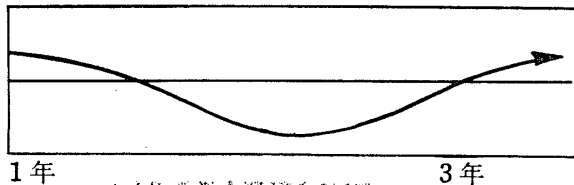
E類型



このようなタイプは数が少ない。成績が降下し始めた時期を知って、その原因を見つける必要がある。成績が上位にあった者が、このように降下するのを防ぐのも広い意味での遅進生指導であろうか。

6. F類型 (5名)

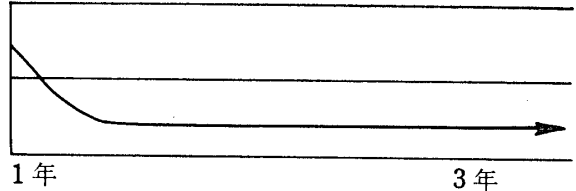
F類型



一時は下位まで下ったが、やがて、上位ではないが+σあたりまで回復した生徒である。このような生徒もやはり下位になった時期に問題があるから、降下した時期の学習内容をも生徒自身に確認させ、再び、同じことで困難にすることを避けた方がよいであろう。

7. G類型 (5名)

G類型



このタイプもA類型と同様に、直進する場合、-σ以下を進む場合と、-σあたりを進む場合がある。どちらの場合も、学習初期には上位の成績であり、その後、急に降下したのである。降下するのは大体一年・二学期である。急に興味を失ったのであろうか。原因は何であろうか。このような生徒を回復させるには、A類型と同様、継続的な努力が必要であり、B類型に連続していくことがよいであろう。

V. 遅進生徒の英語に対する意識

遅進生徒に記名でアンケートを行った。その結果を類型別に分けて表にまとめてみた。尚、二名の生徒は都合で調査できなかった。

表1

英語は好きですか

事項 \ 類型	類型						
	A	B	C	D	E	F	G
好き	1	2	0	0	0	2	2
きらい	1	1	2	0	0	0	2
どちらでもない	7	2	1	3	2	3	1

良くない傾向のA・Gに「好きだ」と答えている者のあることを注目したい。これは先に述べたように、A・G類型は大別して二種類あり、この生徒達は、その偏差-σあたりを進む者（記名調査であるから明らか）であるのであまりに不自然ということでもない。むしろ、決して良い成績ではないこれらの生徒達が、「好きだ」という意志表示をすることは良い傾向であり、教師にとっても救いである。良い傾向のB・F類型に「好きだ」というのが出るのは当然である。又、C・G類型に「きらい」というのが出るのも不自然ではないが、やはり指導の問題点となろう。全体としては「どちらでもない」というのが多いのもごく自然であろう。

表2

英語の授業時間は楽しいですか

事項 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
楽しい	0	2	0	1	0	0	0
楽しくない	0	0	2	2	0	1	1
どちらでもない	9	3	1	0	2	4	4

「楽しい」というのが、B・D類型だけにしかないのは無理からぬところである。教師側としては残念であるが一考を要しよう。全体として「どちらでもない」に集まるのは当然と思われるが、A・G類型が、この項目に集ったのは好ましいことであろう。表1と同様に積極的に興味を失っているものは少ないので、興味付けの指導が積極的に為されるならば、向上させる道も開けるだろう。

表3

英語は他教科と比べて難しいですか

事項 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
難しい	8	4	2	2	2	4	5
やさしい	0	0	0	0	0	0	0
どちらともいえない	1	1	1	1	0	1	0

表4

英語は大切だと思いますか

事項 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
思う	9	4	3	3	2	3	5
思わない	0	1	0	0	0	2	0

明らかに、殆んどの生徒が英語を他教科より難しいと考えており、過去の積み上げが不足していることがうかがわれる。しかも英語は大切な科目であることを認識している。「大切でない」としている者の理由は、「実社会では必ずしも必要なものでない」としている。

表5

家で英語の予習をしますか

事項 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
毎日する	2	2	1	1	1	3	2
時々する	6	3	1	2	1	1	3
たまにする	1	0	0	0	0	1	0
ほとんどしない	0	0	1	0	0	0	0

表6

一日の予習時間

時間 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
5分				1			
10分～30分						1	
30分	6	1	1			3	3
40分							1
45分					1		
30分～1時間		1				1	
1時間	3	1		1			1
2時間		1					
無回答		1	2	1	1		

殆んどの者が多少の差はあれ予習をしている、予習時間は表6のようであるが、良い傾向であるB類型では多時間予習をしており、今後の向上が期待される。最も好ましくないA類型でも何らかの予習はしているが、この類型に属する者は予習よりも復習に重点を置くべきであろう。次の表8を考え合わせると、この感を一層強くするのである。

表7

家で英語の復習をしますか

事項 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
毎日する	1	2	1	2	0	2	0
時々する	7	2	0	0	1	2	3
たまにする	0	1	1	0	1	1	2
ほとんどしない	1	0	1	1	0	0	0

表8

一日の復習時間

時間 \ 類型	A	B	C	D	E	F	G
20分					1		
10分～30分						1	
30分	4	2	1			2	5
40分						1	
1時間	4	1				1	
1～1.5時間		1					
1.5時間				1			
無回答	1	1	2	2	1		

予習の場合と大体同傾向である。又復習時間も、予習時間の傾向と同様である。しかし、この同じ傾向は先にも述べたように、この生徒達には決して望ましいとはいえない。まず復習重点主義で勉強させるのが望ましいといえよう。又復習時間の比較的短かい者が多いのも注意せねばならない。しかし、この生徒達の多くが、他教科においても学力遅進ならば、一教科に勉強を集中することを望むのは酷かもしれない。

表9 英語で一番解りにくいのは何ですか

類 型 事 項	A	B	C	D	E	F	G
英語を訳す	0	0	0	0	0	0	0
日本語を英語にする	9	3	2	2	2	4	4
アクセント発音	0	1	1	1	0	0	0
英語を聴いて理解する	0	1	0	0	0	1	1

どの類型も和文英訳を不得意としているが、これは先にも述べた学力の蓄積がなく、特に学習初期に英語の構成を会得できなかったせいと思われる。英文を理解させると共に、暗誦を十分に練習させる必要であろう。しかし、和文英訳は学力の進んだ生徒も不得意とする場合が多いので、このことを、遅進生の特徴とは必ずしも言えないであろう。

## VI. 教師による遅進生徒の観察

関係教師にこの生徒達一人一人について意見を求めた結果である。

表1 性格

類 型 事 項	A	B	C	D	E	F	G
明 朗 活 発	0	2	2	2	1	1	1
引っこみ思案	4	0	0	1	1	2	1
どちらともいえない	6	3	1	1	0	2	3
真 面 目	5	1	0	1	2	4	3
不 真 面 目	1	1	2	0	0	0	0
どちらともいえない	4	3	1	3	0	1	2

A類型に「引っこみ思案」が多く、「明朗活発」が全くないのは注目されよう。「明朗活発」も全体で相当多いのは良い傾向といえよう。又、不真面目な者も少く、真面目な者が、かなり多いことは、やはり良い傾向である。C類型に「不真面目」が二名いるが、こうした性格が、成績に結びついたといえよう。しかし、受験をひかえてどの生徒も真剣な態度で臨んでい

るとも考えられ、一・二年の時にこのような結果が得られるかどうかは疑問である。

表2 学習態度

類 型 事 項	A	B	C	D	E	F	G
熱 心	4	1	0	1	2	3	2
不 熱 心	2	0	1	0	0	0	0
どちらともいえない	4	4	2	3	0	2	3

不熱心な学習態度を示す者が少ないのは、良いことであるがA類型の二名は英語学習を放棄した感がある。全体には「どちらともいえない」というなまぬるい態度が多くなっている。これは、生徒の自信のなさから積極的な学習態度が示されないからであろうか。

## VII. ま と め

前回と今回の調査から、学習初期に遅進の経験をした生徒は、その後、伸び悩み場合が多い。又類型化したものからもわかるように良い傾向(B・F類型)の者は少く、良くない傾向(A・C・E・G類型)の方がずっと多い。このことは、遅進生になるとぬけ出すことが難しいことを裏付けるであろう。又、前回も述べたが、良い傾向の場合も偏差+0以上には殆んどなれない。以上の事から、遅進生徒指導としては、学習初期に困難を起した場合、できるだけ早く、それをとりのぞいていくことが必要であろう。具体的には、一年の夏期休暇と冬期休暇或は授業後、遅進生対象の補習等が考えられよう。しかし、こうした場合は教師側としても、かなりの負担を覚悟しなければならないであろう。次に一年或は二・三年になってから下降し、遅進生徒になる類型(C・E・F・G)の場合は精神面の指導も、学級担任と共に強くする必要があろう。教師側としては遅進生徒の動向を個々について知り、利用できる傾向は大いに利用し、類型に当てはまってしまふところまで進んだ場合は、その後を予測して上昇傾向に転換させるべく指導せねばならないだろう。

## VIII. 今後の方向

ここでは、前回述べたごとく遅進生の基準を標準偏差で出した為、「相対的な遅進生」である。従って遅進生がゼロになることはこの調果ではない。だから、適当な標準テストを行う必要がある。又、まとめて述べたように指導法の仮設がほぼできたので、今後これを実施検討することが課題であろう。